

早期体験学習（薬局見学）における薬剤師による学生の評価と検討会開催の意義
○伊藤 栄次¹, 中村 武夫¹, 松野 純男¹, 桑島 博¹, 三宅 義雅¹（¹近畿大薬）

【目的】6年制薬学教育のモデル・コアカリキュラムの一つである早期体験学習が始まって5年が経過した。当初より薬局見学を取り入れ、受け入れ薬局の薬剤師による学生の評価を行い、薬局と大学が連携を密にし、効果的なものにすることを目的とした。

【方法】平成22年8月上旬に、近畿大学東大阪キャンパス周辺にある大阪府薬剤師会所属の保険薬局で、見学を実施した。受け入れ薬局の薬剤師にチェックリストと評定尺度（5段階）を組み合わせたシートで学生の態度等の評価を、気づいた事を自由欄に記載を依頼した。また、本年に見学を行った全学生のレポートと5年間の評価結果をもとに、受け入れ薬局薬剤師と大学教員とで検討会を開催した。

【結果および考察】「あいさつができる」、「自己紹介ができる」、「服装が整っている」に関して、ほとんどの学生ができているが、本年度はできない学生が、例年に比べ多かった。本年度の「この体験学習で何かつかもうとしている積極性が見受けられる」は4.09、「患者さんに対する接遇を注意深く見学している」は3.75、「担当薬剤師の質問に対して、はきはきと答えることができる」は4.21、「自分から薬局や薬剤師業務について質問できる」は3.94であり、過去4年の平均値と大差はなかった。自由記載欄の多くに、積極的であり、熱意が感じられるという記載が多い反面、逆の記載もあった。検討会で、次年度より学生あるいは薬剤師がする質問のテーマを1つ決めておくことで、学生の感じ方、興味の持ち方などを鮮明にすることにより、薬局見学の実施がよりよいものになると思われる。このように検討会を開催し、大学教員と薬剤師が問題点を共有することで、薬局見学がより改善されることが思われる。